



P.I.E.GROUP.SANDA パイグループさんだ

News Letter Vol.8 臨時特別号



地域コミュニティの健康福祉向上を目的とし、病気の予防(Prevention)、介入(Intervention)、教育(Education)を提案する情報誌

大和証券福祉財団

第27回 ボランティア活動助成活用事業

第二回 キャンサー・ピアサポーター養成セミナー

病の体験綴り方講座 作品集



正岡子規 (1867-1902)

この度、綴り方教室の講師を務めさせていた
できました。

明治という日本の新しい時代に、重い病のなかで、作家として死ぬ間際まで表現しつづけた正岡子規。彼の残した文章や、短歌、俳句、日記などを、講座に参加された皆さんと一緒に味わいながら、病について、あるいは病のなかで表現することの意味を考えることができたように感じました。

その中でも一番はつきりしたことは、文章に書けば、形のある「もの」として残るということでした。逆に言えば、ここらほどこまでも形を持たないイメージのようなものでした。病気をしてさまさまに、感じていることや考えていること、あるいは感じたことや考えたことを、消えてしまわないうちに、変化してしまわないうちに、書き留めて、形を与えておくということでした。

書き留める作業には苦しさもあったでしょうが、みなさんの文章を拝見していましたら、苦しさよりも、楽しさの方が伝わってきました。でも、書くのに勇気が必要とした人もあったかもしれません。それはともかくも、皆さんの、いまある思いというものが、確かに目に見えるものとなり、多くの人に読んでもらえる機会が実現したことを、とても喜ばしく思います。できることならば、読んだ感想をお互いに交換してみたいかがでしょうか。



2021年9月15日
はしぐち丈志

妻の笑顔を見るために生きる

私は一年前に胃がん切除の手術をしました。72年生きてきて初めての経験でした。病院での生活は初めてであり、4人部屋の中にベッド1つでの入院生活は窮屈で、なかなか慣れることが出来ませんでした。

これを機に私の今までの人生を振り返ってみようと思いました。

私は、今まで、電気機器、半導体製造装置、理化学分析機器の営業・修理と、建物設備保守管理に40年従事し、営業売り上げ未達成や、クレーム解決、さらに品質向上プロジェクトリーダーに、機器の検査や、設備機器工事立ち会いなどの多様な業務をこなして来ました。

これまで、様々な出来事がありましたが、そんな中でも私がここまで無事に過ごせたのは、妻との絆のお陰であったと改めて気付かされました。

今まで、妻は、毎日毎回私の健康に配慮した献立を考えて食事を作ってくれていました。また、会社が倒産し精神的にも落ち込んでいたときには、気を配ってくれて、生きる勇気と希望を与えて私を支えてくれたのでした。

入院中は、コロナ感染があるので、病院側

も面会には神経質でした。しかし僅か数回で、それも数分間でありましたが、実際に会えたのがとても嬉しかったです。このことは病院にも、妻にも感謝しています。

退院時、私の体重は42kgまで減少し、ガリガリ状態となり、過去最も軽い自分の裸を見たときには、骨と皮になっていて、我ながら恐ろしくなりました。

退院後には、妻と一緒に病院の管理栄養士を訪ねて、今後の食事方法や、食事回数（1日5回に分食）、食材として食べても良い消化メニューや、食べてはいけない食材などについて相談をし、度々ご指導を受けました。

今は少しながら徐々に体重が増加し、食事も美味しく頂けるようになってまいりました。それは、妻が時間を掛けました一日5回の手料理の効果の賜物だと思い、ただただ感謝するだけです。



その一例を紹介します。

・“とまと”の表面皮を剥いて、消化が良くなるように。

・“りんご”の皮を除き、磨って食べやすくする。

・“うどん”を、3cmに切り食べやすくし、消化しやすいようにする。

・“お米”は、おかゆにする。

・朝食は手作り味噌に“まいたけ”のキノコ類の小刻みと、野菜を多く入れた味噌汁、ご飯と、野菜の和え物、しらす、および、ヨーグルト・蜂蜜・バナナ・黄粉のミックスしたデザートを頂いております。

・入浴については、私が明るい時間が好きなので、夕前の5時30分に毎日入り、その後、夕食するようにしています。習慣としまして今も続けています。

毎日食事前には妻に軽くお辞儀して、ありがとうございますと必ず感謝を伝えます。

妻と私は、結婚して43年が経ちましたが、初めからずっと二人三脚で助け合ってまいりました。私が、昨年夏に手術をした後、更に絆が強くなり、退院後も以前と同様に二人三



脚の生活を送っています。

よく考えてみたら、胃がんが恐ろしくなかったのは、妻からの支えと、妻への感謝の中で生きる気持ちが私の中で増してきたからです。

これからも一日一日を大切に今の病氣と向き合い、自分を見つめ、新しい自分として、今後20年間は楽しみを多く作り、生きる喜びを2人で感じ味わえる生活を目指しています。

2021年9月1日

あきちゃん



☆ヘアードネーションへの挑戦☆



私の父は、癌で3年前に亡くなりました。

闘病中も、何度もお見舞いにきました。

父は、とてもモダンで、いつもお洒落でした。仕事に行く前や出かけるときなどには、必ず、鏡に向かって、櫛で髪の毛をといっていた父の後ろ姿と、その所作を今でもよく憶えています。

抗がん剤治療で、髪の毛が抜けることを聞いて、かつて美容院でロングヘアをカットする際に、いつも、もったいないと言われていたことを思い出しました。

当時の私は、髪の毛を寄付することができるということを知らなかったのです。

父がいない現実を3年経った今でもなかなか、受け入れられずにいます。寂しいです。

そんな思いから、闘病されている癌患者さんや御家族のために、少しでも希望を持ってほしいと思うようになりました。

そこで、美容院を探したり、ヘアードネーションのことを調べて、31cm以上の髪の毛の寄付をしようと決意しました。

今は、美容師さんともお話をして、もう少し髪の毛を伸ばしてから、寄付をする方向で、お話を進めています。

野口 由香里





病気だと診断されてからもそれを受け入れず生きていた。

体調不良に振り回される現実を目を向けず、同世代と同じように人生経験を積み、遊びに仕事に打ち込みたいと突き進んでいた。

でも、ある時期に人生のなにもかもに行き詰まり、人生を一旦ストップした。ここからだとも一番底まで落ち、自分の病の部分から目をそらすことができない状況に陥った。重い病に直面し、体調不良に正面から向き合うことになった。

しかし、人生が続く限り、生きてゆくかぎり、ずっと病気との付き合いも続いてゆくのだからと思うと、病気になった自分を受け入れられなかった。自分の弱さ、病気を受け入れる



ことができない状況がずっと続いた。自分の弱さを認められず、そんな自分を愛せないという根本の部分を変えることが自分の人生には必要だった。それは、今の体調に合わせた生き方を選択して、今のあるがままの自分を認めること。つまり今というときに焦点を当てて、今の自分を見つめ病を受け入れることが大切だと気づいた。

病気をする前と、今とでは違う価値観をもつことができたので、変化した自分も、病気のこと、受け入れてこれからの私は生きていく。

ゆうこ

何気ない、その言動に傷ついて

2015年10月乳癌と診断され、職場の上司や同僚に報告した。「仕事のことは気にしないで、治療に専念してね」「頑張って待ってるから」等々、沢山の励ましの言葉をもらった。中には、言葉はなく、涙を流してくれた人もいた。嬉しかった。

仕事に復帰する事を目標に、外科治療や、抗癌剤治療、さらに、放射線治療を受けた。病欠中、病状報告するために、1カ月に1回位のペースで職場に行った。最初の頃は「どう？大丈夫？」と優しく声を掛けてくれていた同僚。しかし、月日が経つにつれて、一部の同僚の態度に変化を感じた。

そこから、復帰できる喜びよりも、不安の方が徐々に強くなった。

2016年4月、半年振りに仕事復帰。自宅療養中に感じていた以上に、体力の低下を痛感した。以前のように動けない。時々椅子に座って休憩しないと体がもたない。情けない、ロッカールームやトイレで何度も泣いた。

「ご迷惑をお掛けして、すみません」と言っても、目を合わせることもなく「いいえ」と言われた。朝の挨拶や退勤時の挨拶も、小さくて低い暗い声での返事だった。陰では「ま

ともに働けないのなら、来なければいいのに」と言われている事を知った。このような環境で働く事に限界を感じ、主治医に相談した。上肢のリンパ浮腫の悪化もあり、5カ月間休職したのだった。



何気ない、その言動に救われて

2017年1月、他の部署の上司Tさんから「体調どう？ そろそろ帰って来て、私と一緒に働かない？」と電話があった。突然の事で、びっくりしたけれど、嬉しかった。Tさんは、子宮癌の経験者。1週間程考えて、主治医にも相談した。「くれぐれも無理をしないように」と言われ、2月16日から復帰した。私の体に無理のない業務内容と、役割りを準備してくれていた。「ゆっくりでいいからね。無理しないでね」と、いつも声を掛けてくれた。分からない事は、親切丁寧に教えてくれた。他の職員も同じように接してく

れた。久し振りに、楽しく働く事が出来た。復帰してから4年半、ホルモン剤治療と、上肢のリンパ浮腫治療を受けながら、働く事が出来ている。主治医と、職場の人達に恵まれた。そして、樋野興夫先生の著書、「病気は人生の夏休み」〜がん患者を勇気づける80の言葉に出会った。

- ・ 今日一日を一生懸命に生きようとする
- ・ 明日よりも今日の方が大切
- ・ 人前で泣いてもいいんだよ。そのときあなたらしさが出る
- ・ 小さなことに一喜一憂しない
- ・ やさしく、丁寧に、しとやかに

e t c .



たくさんさんの言葉と、優しさに救われた。抗癌剤治療で失った髪もずいぶん伸びた。そろそろ「ヘアードネーション」が出来そうだ。私の髪で、脱毛に悩み、苦しみ、傷ついた人の気持ちを救う事が出来たら、とても嬉しい。

イッシー

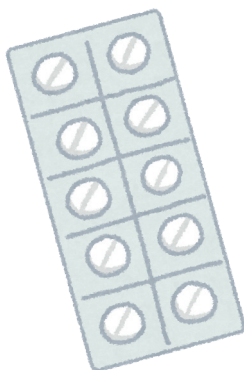


私は平成25年9月、49才で大腸ガンを手術し、その後飲み薬の抗ガン剤ゼローダを約半年服用しました。その半年後、会社の人間ドックで乳ガンが新たに見つかり、平成27年1月に温存手術を受けました。

ドクターには再発・転移ではないので、2回目の手術が出来ることを良かったと言われたのですが、その時の私には良かったの意味が分かりませんでした。

それから25回の放射線治療と5年のホルモン療法薬を服用して、今の私がいいます。

まだ健康な体には戻ってはいませんが、治療中もあまり弱ってしまう事もなく、ずっと元気でいられたのは、とても幸せなことだな〜と思います。



私がガンになる4年前に姉が、乳ガンになりました。

姉は、代替医療選択後、点滴の抗ガン剤で治療し、平成25年3月にリンパ節を切除しましたが、脳に転移してしまい、4月には小

脳切除をしていました。

姉が乳ガンになった当初は、セカンドオペニオンまで姉夫婦と一緒に病院まで行っていたのですが、姉を怒らせてしまう事があり、そこから疎遠になっていました。もし姉が私からの電話に出てくれなければ、姉が2回の手術をした事も知らないでいたのです。

3度の抗ガン剤治療で、髪も抜けてしまったり、辛い経験の後、姉は平成28年1月末に53才の若さで亡くなりました。

2才違いの姉が亡くなること自体、私の人生で一番起こってほしくない悲しいことでしたが、心の準備も出来ないまま突然の別れの日を迎えたのでした。

しかしそれ以上能耐え難かったのが、姉が自分の病状を姉の意識のあるうちは、私に伝えないうように病院側に言っていたこととです。ですから1月に姉が入院した後、亡くなる2週間前に、姉にはもう伝えられない余命宣告の段階で病院側からドクターを通じて私には知らされたのでした。ドクターに言われた事を信じられない内にあつという間に彼女は亡くなってしまったのです。亡くなる



という現実が起こった時から過去にそのことを知らなかった私は、姉にどうしてあげたら良かったのか、後悔ばかりが出てきてしまいます。

唯一の救いが、私も乳ガンになって仕事を休職している時に姉と仲直りが出来て、一緒に買い物や食事に行けた事です。



最後の姉の誕生日は、私と2人でホテルの催し物に出掛けて、一緒に過ごしました。そこには姉の私への想いが感じられました。一緒にガンになって過ごした日の思い出を残してくれた姉に感謝しています。

その反面、身内にも病状を伝えない制度には、理不尽さを感じます、

姉の周りにいた人達すべてが、本当に辛い人ほど辛いと言えない現実に気付かず、最後まで強い姉にしてしまった、あるいは姉をそのような追いつめてしまった状況を、今も私は許せずにいます。

姉の死は、私にとって乗り越えられるものではなく、この辛さ・悲しみと共に生きていくことが、私の生き方です。

共に生きたかった姉との未来はすでになく、二人で共有した思い出は、私だけのものとなってしまいました。私の中には、生きていた楽しかった思い出は、忘れることなくあるので、姉の生きた証は、私が持っているのですが、その反面、私の生きている証を持った姉が、もういないわけで、過去の私の記憶を二人で確かめることが出来ない、相槌を打てないのが、とても悲しいです。

姉との記憶は、共に結婚していたので、日常的には、今も私は変わらず、誰かと姉との日々を話し、そうすることで、私の知らなかった過去の姉には、今でも出会える気がしています。



見返りの記 心にうつりゆく病のこと振り返りますれば。

産まれた時から虚弱で食は細く大きな声で泣くこともなく親に心配をかけたようです。幼稚園の時、風邪をこじらせ肺門リンパ腺を患いました。丁度昭和二十五年頃アメリカからパスやストレプトマイシン等が輸入されたため、一年間自宅療養となり、小学校へも一年遅れで入学しました。運動をストップして、栄養をつけるため、戦後まだ物の乏しかった時代に親のお陰で贅沢三昧な日々。小学校二年生頃より急に肥満になり、今では肥満など珍しくありませんが、当時では指さされて笑われました。今思えば旨い物の食べ過ぎだったと思いますが、何とか元気に育ってほしいと願う親達の愛情以外の何物でもなかったでしょう。

主たる病歴と色々な出来事

昭和五十七年十二月 右卵巢囊腫茎捻転術後
腹膜炎
社会保険中央病院入院

親指の先程の大きさの卵巣が新生児大4kgゼリー状の液が溜まり、念の入ったことに二回転していました。拳大位の時が一番捻れ易

いとのことですが、これだけ大きくなるとお腹も大きくなり気付きそうなものですが、常に肥満で自腹が大きかったので、気付きませんでした。明け方急激な腹痛で救急車で運ばれ、救急病院で病気の原因が分かるまで数時間を要し、設備のある病院に到着したのは昼前。捻転のため血が通わず壊死が始まり、死が時間の問題となり、緊急手術となりました。強烈な痛みが続くと気が遠くなり、快感のような錯覚を覚えました。この時は下腹部を横に切開、腫瘍が大きいため取り出せず、一升瓶に液を抜いてから摘出、一カ月で退院はしたものの体力低下、微熱等で再入院、原因不明のまま半年入院。結局は腹膜炎の一種だったようです。私の人生では不思議なアクシデントが多く発生している様に思われます。

平成十年十月 脳ドック受診により、北村クリニク

左中大脳動脈狭窄症、血流にも乱れがあると診断。大事に至らず今日に及んでいます。

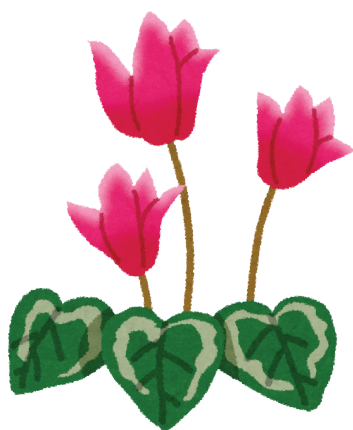
平成十五年四月 異型狭心症 労災病院にて検査

私の場合は、心臓周囲の血管の痙攣で起きる、不思議と胸、背、時にはこめかみあたりまでの軽い圧痛が決まった時間に。ヘルベッサ―100を三年前まで服用。現在は忘れた頃に

軽い圧痛が起きる程度です。

平成十六年より 変形性両膝関節炎

数年前より時々痛みはありましたが、両膝に水が溜まり三年間注射で水を抜いたりして専門家のアドバイスでリハビリに数年励み、その効果で水は溜まらなくなりました。しかし、痛み等は現在も継続中。大好きな正座が困難になりました。何事も一度悪くすると完治は難しいようです。



さてこれからが本来のお話となります。

平成十八年十二月 子宮体ガン発見

平成十九年二月 手術

神戸大学病院にて入退院繰り返す

一寸先は闇とはよく言ったものです。ガンと聞いて頭が蒼白になったとか、なんで自分がとかよく聞きますが、私の場合はショック

を受けることもなく、「あつ これで皆のところに逝ける」と母や叔母達も見送り一人になっていましたので安堵感を覚えて嬉しくさえ思い、何の執着も未練もなく、清々しい気持ちで、自然に任せたいと思ったのです。しかし諸先生方が、「治療法のある間は受けるべき。セカンドオピニオンも行きなさい。そのうち助けてくれと言われても何もできなくなるから。生命は大切にしなければ。」というごもつともなお言葉に従いました。

このガン発見には、私が何気なく世間話のつもりで話した一言をかりつけ医の妹尾先生が聞き逃さず、鋭い指摘のおかげで「検査だけでも受けなさい」と迅速に手続きして下さいました。この妹尾先生の働きがなければ、私はとつくにこの世のものではありません。どんな些細な事でも報告する大切さも学ばせて頂きました。

この度の手術はおへその上、胃の辺りから下腹恥骨上部まで切開しました。思ったよりも進行しており、傍大動脈や腹腔内、リンパ節等に多数転移があり、ステージⅢC、子宮、卵巣全て全摘、リンパ郭清、腹腔内清掃、リンパ節切除いたしました。その後即、抗ガン剤点滴を開始、六日間入院、それを六回、六ヶ月ワンクールで。しかし二年間続けている間にも再発。その上左肺と左鎖骨に転移。何とか転移のガンは消滅するも、腹腔内の再発は

増大し、抗ガン剤変更しても効果なく、放射線との併用を勧められました。しかし体力の消耗が強く最後まで受けきった人はほとんどないとのこと、効果は低くとも別々にして頂きました。放射線に切り替え、かなり強度な量を土日を除き毎日通院で三十五日照射。効果があつて腫瘍増大は止まるものの、その後も四年間抗ガン剤点滴しました。

ガンというものは自分自身の毎日起きている細胞分裂からのガン化であり、オリジナルなもの。人各々に違うのだそうです。抗ガン剤の副作用も人各々だそうですが、私の場合は並のものでなく、初めての一本目点滴中より、足先のしびれが出ました。数え上げればきりがなく毎回同じものやら違うもの。長期のものから短期のもの。味覚障害など口唇を舐めても気分悪く、食べられない日が続きます。倦怠感、これは表現できないしんどさです。骨筋肉の疼痛、皮膚疾患等々。その上、リンパ節切除していますので、つま先から臀部脇腹までリンパ液が溜まって重だるく、恥骨の上まで腫れる時があります。この様な症状が同時に出るので辛いです。症状が和らいだ時分に次の点滴になり、結局ずっと不快なままです。

そして皆様も一番ご存知の脱毛。抗ガン剤投与三週間目位から脱毛と、術前、先生から

の説明通り、丁度三週間目から脱毛がはじまりました。院内の美容室で長髪を短くカットしておきました。私の場合は右前頭部からごっそりと三〜四日でするつるの丸坊主。丁度四谷怪談のお岩様、髪梳きの場と全く同じでした。何でも芝居と結びつきますが、薬とは毒にも薬にもなる…怖いものですね。脱毛というと頭髮だけのイメージでしたが、毛という毛、全て!!眉毛、まつげ、脇の下、陰毛と。無くなつてはじめて各々の役目があり、無駄なものは何一つないことを改めて学びました。抗ガン剤停止から半年から一年で元のように生えてくる人がほとんどですが、私の場合は中止から現在六年位経ちますが、シヨボシヨボしか生えていません。頭髮や脇の下の毛等は、汗や体臭を防いでくれます。発汗など今は頭部から背中、顔面と流れ落ちます。ウィッグ等も自毛があつて冠ると、夏は涼しく、冬は暖かいのですが、坊主頭で冠りますと、夏は暑く冬は寒いものです。



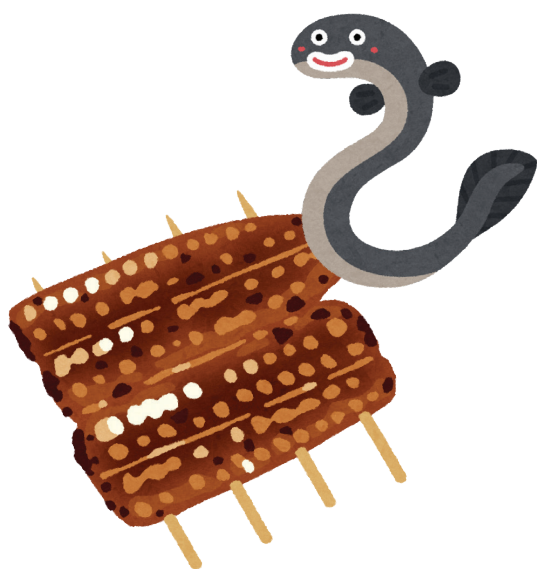
こんな状態で入退院を繰り返しているうちに原因不明の高熱等で入院、余命一カ月程の診断を受けることになりました。



平成二十四年十月 ホスピスに転院

意識障害が起き、二〜三週間の記憶は今もってありませんが、気がつくと林山クリニクホスピスに転院になっていました。十月三十日付神大病院での日記はしっかり書いているのですが、この意識障害の間、夢か現かわかりませんが、ベッドの両サイドから母と叔母がずっと見守ってくれていました。三途の川を渡るとき、皆様よくお花畑や手招きされたとかお聞きしますが、私の場合は湿地帯を私一人が船に乗り、背後に船頭さんらしき人の気配は感じたものの誰一人として居ず、船頭さんに御祝儀が足らずしてか、気がつくと此岸に戻っておりました。そして少しずつ物事の判断がつくようになってきました。ホスピスですので、酒、タバコ、犬や猫o.k.ということもあり、好きな風呂も朝一番に

毎日入れてもらい、晩酌をしたときの旨かったこと!! これという治療もなく、あれで元気取り戻せたと思っています。病院食は栄養の面では十分ですが、決して元氣の出る食事ではありません。やはり食べたいときに食べたいものを飲食してこそ元氣が出るように思われます。神大に入院中も馴染の魚屋さんに鰻の蒲焼、病室まで届けてもらったこともあります。最期を迎えに行くところで、一カ月弱でホスピス退院しました。今まで私だけと伺い、恥ずかしいやら申し訳ない複雑な気持ちでした。後で知りましたが、神大の先生方、看護師さん達も最期の別れと思って、車のところまでホスピス行きを見送ってくださいったそうです。諸先生方も奇跡としか思えないとのことでした。



平成二十五年十二月 あらたに膀胱ガン発症 林山クリニクより一年後、排尿できなくなり妹尾先生受診。管を挿入して排尿。即、大学病院へ連絡して下さいましたが、土曜日の午後ということと、私が延命治療等不要とお願いしていたため、なかなか受け入れてもらえなかったのですが、妹尾先生の熱心な説明で何とか診察して頂き、幸い当直が泌尿器科の先生で、そこで膀胱ガンとわかり応急処置で、後日入院手術しました。幸い、人工膀胱を装着したり、時間で管を挿入して排尿ということにもならず一安心でした。かなり膀胱内筋層を深く切除しているので、頻尿、尿漏れは仕方なく進行性のガンにつき、再発防止のため、BOOを尿道より膀胱に直接注入、週一回を六回受けました。その後定期的に膀胱鏡や検尿。今のところ再発なく過ごしております。ガンの時右尿管を圧迫するように大きな腫瘍ができ、尿が流れなくなるといけなので、腎臓より膀胱に尿管内にカテーテル挿入、三ヶ月に一度交換しながら二年間、その間は血尿、微熱、感染症数値が高く続いておりましたが、膀胱ガン手術の時、今は不要なのでカテーテル抜いて下さいました。すると微熱や血尿は出なくなり、感染症数値も正常に戻りました。膀胱ガンは子宮体ガンの再発や転移でなく、新たに生まれてきたガンとのことでした。転移があるということは全身

にガンが散っている状態なので、いつどこで新たなガンが生まれても不思議なことではないとのこと。三途の川も渡り一度死んでいたのも、新たに発症したのかもしれないね。今年令和三年一月に「」検査でガンの時、患っていた腎臓に尿が溜まり腫れる水腎症増悪ということ。自覚症状がないため、現在は超音波で定期的に経過観察。尿の溜まる原因も不明ですが、強い放射線を照射しているため、その影響が出てきているのではと放射線科先生の所見です。

平成二十六年三月頃より ペインクリニック受診

時々痛んでいた左右坐骨神経痛が強烈になり、麻酔科にてレントゲン透視下で神経に注射。痛み緩和のブロック注射三年間続行。これも限界があり、脊柱管手術に移行していきます。

平成二十八年三月 神大にて両眼白内障手術
緑内障気味だったので子宮体ガン手術の前日に、使用する麻酔薬の副作用で失明してはいけなからと、両眼レーザーにて穴を開け水の流れをよくしてくださいました。今もきれいに穴は空いているとのこと、白内障も手元に焦点を合わせて頂き、緑内障の心配もなくなりました。ただホスピス等の時期に大

量のステロイドを投与していますので、その副作用で両眼網膜に水が溜まり、腫れがあり視力低下。現在左眼は正常。右眼網膜の腫れのみがあり、多少視力は落ちていますが、定期的に眼科検診を受けております。

ステロイド副作用でもう一つ。急に血糖値が六〇〇以上になり二年間程、糖尿内科でコントロールして頂きました。すべて神戸大学の諸先生方のお世話になっております。そしていつも窓口は妹尾先生にご配慮頂いて、心強い限りでございます。

リンパ浮腫も医療用の弾性ストッキング装着など対処しております。

平成三十年九月 脊柱管狭窄症等の手術

腰椎すべり症等、五、六年前から手術の対象にはなっていました。生命の危険重視でガン治療が優先。その間に脊柱管内の神経圧迫が進み、歩行困難、しびれ、麻痺、感覚鈍麻や頻尿、尿漏れ等々、現れる症状がガン副



作用と重複で、二十四時間不快な状態を数年過ごしてしまいました。骨等のズレはあっても神経の圧迫がなければ問題はないのですが、私の場合、骨のズレはわずかでも、神経の圧迫が強く、神経というものは一度ダメージを受けると修復は不可能とのこと。手術の目的は歩けなくなるのを防止することであり、現在起きている不快な諸症状は少しでも緩和されれば良いのですが、むしろ増悪する場合が大きいとの説明通り、しびれ、麻痺、感覚鈍麻、痛み等は手術の度に、広範囲に強くなっております。背骨のところに二本の金の棒を左右から入れ、数十個のネジ釘で固定いたしますので、身体の柔軟性を損ない、日常生活にも影響を及ぼします。ですので、それも考慮して令和三年七月まで三年半の間に四回の大手術になりました。ガンの時は腹開き、脊柱管狭窄等の時は背開きと、東京と大阪の鰻のさばき方の違いのようなことで自分でも苦笑しております。

平成三十年

九月 腰椎一、五の一部固定除圧術

退院三日後 尾骨に骨折が起き再入院 主治医の教授をはじめでの経験とのこと

十月 再手術を控え、腎盂腎炎感染症併発

四十度発熱で三週間延期

十一月 尾骨より長い金の棒入れ替え固定

リハビリの為 野瀬病院転院

平成三十一年令和元年

骨のズレが生じ歩行困難

胸椎十までの延長 除圧術

野瀬病院リハビリ転院

令和三年七月

骨のズレ神経圧迫

脊髄造影MRI CT検査等により

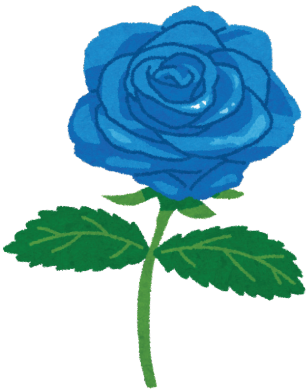
胸椎三まで延長。

金の棒入れ替え 除圧術

現在は座位が辛く背中が冷や汗が出る位の痛みあり。

リハビリは本当に大切なもので、ベッドから起き上がるのが精一杯だったのですが、努力することで日一日とできることが増え、今では多少不自由でも足の爪を切ることができたり、排便の処理ができたりするので少し安心しております。

古傷の膝の痛みやリンパ浮腫等々いつまで



お付き合いますればよいものやら。

本当に医療関係の方々には誠心誠意尽くして頂き、感謝いたしております。頂いた命を生かしきり、少しでも他人のお役に立つ位の気構えで、心身ともに元気な姿を見ていただくことがお世話を受けた皆様への御恩返しかと存じます。

働けなくなつた今、経済的な先が見えてくるのに寿命の先が見えないとは困ったことです。人生ご破算で願いましては0!! これは至難の業でしょうね。

病とは非情なものです。人生を狂わせてしまふことも多いですが、決して病とは悪いものではありません。色々なことに気づかせ学ばせてくれます。当たり前のことが大変なことであったとか、感謝の気持ちを与えてくれました。私の身体で生まれた愛しいガンちゃん、早く帰っておいで。

みずや君 明日は散りなん 花だにも

力の限り ひとときを咲く (九条武子)

(精一パイ 私は生きているのであろうか)

あはれし思ひは晴るる身は捨つる

浮世の月にかかる雲なし

(大石内蔵助 辞世句)

(心清々しく 私は何一つ未練はありません)

振り返りみますれば楽しゅうございました
うれしゅうございました 感謝あるのみ

令和三年七月吉日

玉田佳代子 七十五歳

付記

献体について。今は篤志家も多くなりましたが、祖父母が、京都大学教授より若い学生のためにと献体のお話があり、昭和三十六年当時は行き倒れの人を解剖する位だったらしいのですが、死んでお役に立つ、こんな嬉しいことはないと京大白菊会に入会。その後母や叔母もお役に立てて頂き、私も入会しております。祖父母は大阪ミナミで舞台、映画等の髪屋を営んでいましたが、大阪空襲で焼け出され、その後京都映画全盛時代で京都に住んでいた関係で、京大にお世話になっておりました。臓器移植も大切なこととは思いますが、立場を変えて自分が受ける立場になった時、他の人の死を待つことに多少の違和感を覚えます。若い命など救ってあげたい気持ちと複雑です。

ガンだけの時は体調の良い時は舞台にも立てたり、浅香光代先生の代稽古等でお役に立てましたが、足腰を悪くすると何もできなくなりました。今、思っていることは日本舞踊



は医学的にも有酸素、無酸素運動、体幹、ストレッチ等身体に良いと研究発表されていますし、曲を聴くことにより脳や心にも良い刺激と認められています。様々な障害のある方とできる範囲で楽しんで頂けることがあればと考えています。親しくして頂いている桂福団治師匠も一時声を失ったことで手話を覚え、今は手話落語創始者として活躍もされています。お弟子さんの全盲の落語家の桂福点さんも（NHK Eテレバリバラ準レギュラー）音大卒で音楽療法士、シンガーソングライターなどオールマイティーの活躍で共に勉強させて頂きたいと思っております。

私は職人さんの技というものが大好きです。多数の職人がそうであったように、世間に名は出なくても「仕事」は残るということ。祖父の仕事も銀幕のスターや舞台人が映像や写真で残る限り祖父の仕事も生き続けており

ます。

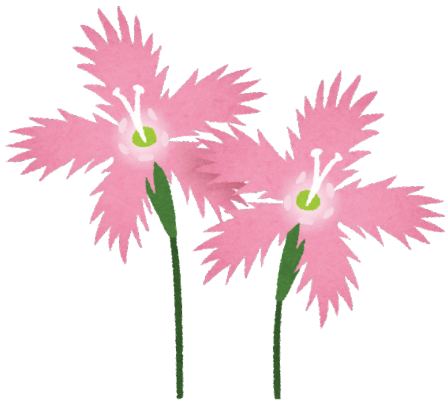
芸術芸能も後世に永く残るものもあれば、その場その場で消えゆく芸も数多くあります。一期一会の儚ない芸能を愛しく思います。誠心誠意の一期一会の舞台を拝見したときは、生きることの喜び。知ることの大切さを覚えます。

病に出逢うのも全くの無縁とは思っておりません。その病を人生に生かせてこそ。

不思議な縁で各々がつながっていることを最近特に感じております。

縁尋機妙 多逢聖因

出逢いに感謝いたしまして、病を通じ心につりゆくよしなしごとを、したためました。



編集後記

今号は、臨時特別号として、8月11日開催の「第二回 キャンサー・ピアサポーター養成セミナー」病の体験「綴り方講座」へ体験談原稿をお寄せいただき、掲載にご承諾いただいた6名の作品を作品集として発行しました。

講座受講前後、2回にわたる橋口先生の添削のもと書き上げた、病を経験した者しか感じることのできない、不安、苦しみ、悲しみ、葛藤、喜び、感謝など、それぞれの思いが沢山詰まった、素晴らしい作品集です。

この作品集をきっかけとして、病氣や健康についてご家族やご友人と考える機会につながれば幸いです。

文末になりましたが、寄稿いただきました作者の皆さま、添削いただきました橋口先生、ありがとうございました。

ニューズレター編集部

●このニューズレターは、左記企業の協賛支援により制作・発行しています。

澤外科（三田市屋敷町）／さんだ在宅医療ネットワーク／Hair's Curar／心泉整体／エリスメディカル／English Cafe SANDA／青豆舎

●イラストは、すべて「かわいいフリー素材集いらすとや（<https://www.irasutoya.com/>）」を使用させていただきました。